

宗岡二中だより 4月号



令和7年4月8日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

「為し、合わせ」が幸せを生む

校長 伊藤大輔

令和7年度が始まります。小中一貫教育「宗岡せせらぎ学園」が本格始動します。私は校長3年目となりました。本年度も家庭・地域の皆様にお支えいただく場面が多々あると存じます。本校及び本学園教育の発展のため、そして児童・生徒のよりよい成長のためお力添えいただければ幸甚に存じます。

さて、昨年度に引き続き、本校が目指す学校像は「自利を以て利他を為す(じりをもってりたをなす)」とします。本号は、この趣旨に触れます。

情熱の教育者として知られる東井義雄(とうい よしお)先生は「**自分は自分の主人公 世界でただひとりの自分を創っていく責任者**」という言葉を残されました。自分を創る責任者は自分です。親御さんでもない。ましてや先生や友人でもない。自分自身です。自分の物語(=生き方)で、自分をどのような主人公にするかは、自分で決めます。それは自分にしかできないからです。

ところで、皆さんは今、「する人」になっていますか。行動を起こす人になっていますか。「やらされる人」になっていませんか。人にやらされていたり、人の顔色をうかがってやったり、誰かにつられてやったりしていませんか。そういう在り方から離脱しない限り、自分の物語を紡ぐことはできません。人は弱い存在です。だからこそ、自分で決めたことを忘れず、小さな実践を積み重ねることで力を付けるしかありません。その営みを怠(おこた)れば、「する人」から「させられる人」になります。「する人」とは自らの一切に責任を負う人のことです。

自分という存在が大きく育つ中学生の時期であるからこそ、皆さんには自分と正しく向き合っていた

だきたい。そして人との関わりにおいても自分がどう在るべきかに心を砕いてほしい。自分(わたし)を大切にできるから相手(あなた)も大切にできるのです。自分を出発点に**為し**(=行動を起こし)、相手の思いを汲み、互いを**合わせる**(=力を結ぶ)ところに、**幸せ**は生まれるのです。九世紀初頭、真言宗の開祖空海は自分と他人のつながりを軸にすえ「修行によって自分も救われ相手も救われる」と考えました。空海は利他を考えるあまり自利の道を失うことを危険視しました。利他とは相手を幸せにすること、自利とは自分が幸せになることです。真の利他を為すには、自己を深めよと説きました。「自利を以て利他を為せ」と。言葉・笑顔・挨拶の実践を土台に確たる自分を育て、確たる人との関わり合いを学んでいきましょう。

さて、学校にとって一人一人の生徒は保護者の皆様からの大切な預かりものです。そして、生徒は学校の主人公です。とは言え、生徒はお客様ではありません。鍛え、磨く存在です。中学校は生徒が今・ここよりも一歩先の社会に出たときに、生きて働く力を付け、感度を高める場です。民主的な社会の担い手を育てる場です。義務教育を終えたとき、未熟な面があったとしても、応援される資質を携えて社会に送り込みたいと私は考えます。したがって本校では厳しさと慈しみをもって、毅然とした姿勢で指導に臨みます。しかし教育の営みは学校の力だけでは成し得ません。「家庭は習慣の学校、父母は習慣の教師」と言われます。習慣の力は、教授の力よりも強大です。保護者の皆様と教育の目的を共にして、お子様を共育していきたいと存じます。